

知ること。伝えること。

— 那須農場の歩みを、未来へつなぐ —



自由学園創立者・羽仁もと子・吉一先生が掲げた「生活即教育」。それは、生活こそ教育そのものであるという考え方です。

那須農場は、その理念を実践する場として、1941 年（昭和 16 年）の開拓以来、多くの人々に支えられながら歩みを続けてきました。開拓農場から酪農農場へ、そして教育農場へ。その歴史には、多くの人々の働きや思いが受け継がれています。那須農場支援活動では、作業を終えた夕食の時間に、先輩方が那須農場の歴史や思い出を語ってくださることがあります。そのお話は参加者にとって大変貴重な時間ですが、その場に居合わせた人しか聞くことができません。

そこで、この「知ること。伝えること。」では、那須農場支援活動の中でお話しいただいた内容をもとに、その歩みや思いを多くの方へお届けします。

このシリーズでは、開拓から教育農場への歩み、東日本大震災後の卒業生による支援活動、そして那須農場を舞台に生まれてきたさまざまな活動や人とのつながりを、関わってこられた方々のお話を通してご紹介していきます。

これから支援活動に参加される方には働くことの意味を、これまで参加された方には新たな発見を、そして遠方などの理由で参加がかなわない方にも、現在の那須農場の歩みを感じていただければ幸いです。

第二回

男子部 41 回生 阿部泰久さんが語る

震災が生んだ 那須農場支援活動の原点

シリーズ第二回では、那須農場支援活動の中で阿部泰久さんにお話しいただいた内容をもとに、那須農場の支援活動がどのように始まり、今日まで続いてきたのか、その歩みをできるだけ忠実に整理し、読みやすい形にまとめました。

阿部さんは、東日本大震災が発生した2011年度に同学会委員長を務め、仙台で被災した同級生・松原さんの活動をきっかけに「震災復興支援室」を立ち上げました。その後、原発事故の影響によって学生たちが来られなくなった那須農場を支えるため、2012年から同学会を中心とした毎月の支援活動に取り組んでこられました。

今回は、震災直後の出来事から那須農場支援活動が始まった経緯、学生たちが農場へ戻るまでの12年間、そこで生まれた多くの人たちとのつながり、そしてこれからも那須農場を守り続けていくことへの想いについてお話しいただきます。





第1章 震災から始まった支援活動

2011年、東日本大震災

今日は、那須農場の支援活動が始まったところからのお話をいたします。

私は、2011年度に同学会の委員長をいたしました。

2011年というのは、東日本大震災が起こった年です。あの震災では、同級生の松原君が仙台で被災をしました。彼は当時、勤めていた会社の仙台の事務所に単身赴任をしており、身体こそ無事ではありましたが、大変な被害を受けてしまいました。

あの日、私は東京の事務所にいたのですが、電車が止まって会社から帰れなくなりました。おそらく仙台にいるであろう松原君に何度電話しても何度メールしても、つながりません。もし、海や川の近くに行っていたり危険な場所にいたとしたら、何か巻き込まれたかもしれない。嫌な予感もしましたが、結局朝まで連絡は取れませんでした。

翌日土曜日、私は家に帰れるようになり最寄り駅から家まで歩いていた時、彼の弟から連絡が入りました。

「兄貴、生きてます。無事です。阿部君、たぶん何度も連絡しましたよね？俺は無事だと阿部に伝えてくれと、兄貴が言ってました。」

膝から崩れ落ちるように、という表現が正しいのかわかりませんが、最悪のことも頭をよぎっていた私はその場でへたへたとなってしまいました。無事でよかった。涙が止まりませんでした。

一生分の涙を流した

松原君は、何人かの社員の方と一緒に会社に避難をして共同生活を始めました。彼は、本社から支援物資が送られてくると、自分たちで使うだけではなく、行政の手が届かないような場所にいる見知らぬ誰かのところにそれを持って行ったそうです。ある時は腰まで泥につかりながら不便な場所にたどり着き、そこにはご高齢のご夫婦がいたのですが、ポテトチップスを一袋渡そうとすると「私たちはいいので、子供たちに持って行ってあげてくれ」と言われたそうです。

社員のご家族が行方不明になっていると聞けば、一緒にそのご家族を探しに行き、避難所をまわって探しても見つからなければ、ご遺体安置所にも行ったそうです。松原君は私に、ご遺体安置所の状況やご家族の様子などを伝えながら「一生分の涙を流した」と言っておりました。

同学会として、何かできることはないか

私たちには想像もつかないような極限状態の中で誰かのために動き続けている彼の、何か手助けがしたい。松原君の助けを待っている人たちの、何かお手伝いをしたい。同学会として、何かできることはないか。離れた場所にいる私たちに、何ができるか。委員長として私に何ができるか、考えました。そんな時に、赤木先生の声がしました。

「松原があんなに大変な思いをしてるんだ。阿部、まずは何か動きなさい」と言われました。

赤木先生に背中を押され、私たちは同学会の本部委員会の中に「震災復興支援室」を立ち上げました。同学会の事務局の先輩の方がいろいろ走り回ってくださって、現地の友の会の方のお手伝いをするという道を作ってくださいました。それから私たちは、手分けして何度か現地に向かいました。私も、福島県の一番北にある海沿いの町である新地町にお手伝いに行きました。福島友の家で膨大な数の支援物資を数台の車に詰め込んで、山を越えて海沿いの道を車で走っていると、ガードレールもなくなった道路のすぐ左側の海に、船や車がひっくり返っていたり、おそらくは流されてしまった家の物だと思われる木材なども浮かんでいました。

とても悲惨な状況を目の当たりにして、言葉が出ませんでした。

自分自身も被災をした松原君は、私たちには想像もつかないほどの苦しみと大きな悲しみ、やりきれないであろう悔しさなどの中で、それでも私たちの先頭に立って現地を走り回って活動を続けていました。

第2章

子供たちが来られなくなった那須農場

原発事故と那須農場

一方、那須農場は、震災の翌日の原発事故によって、このあたりに放射性物質が攻めてきました。風向きだとか地形だとかが関係していたのかもしれませんが。

目には見えない敵である放射性物質の影響を受けて、自由学園は「生活団から学部まですべての子供たちが那須農場での学校としての公の活動をするを取りやめる」ことにしました。つまり、教育農場であるこの那須農場に、子供たちが来られなくなってしまったんです。

親御さんが了承した場合や親御さんも一緒の場合などはその限りではありませんでしたが、学校としての公の活動は一切できなくなりました。

これからは那須農場の支援をしていこう

翌年2012年の5月、同学会総会で更迭式も行われて、私は退任の辞の中で「これからは那須農場の支援をしていこう」と皆さんにお話をしました。

前段が長くなりました。いよいよここから、那須農場の支援活動の話に入ります。

あえて今の話をしてきたのは、震災復興支援室を立ち上げたこと、そしてその背景にあったことを皆さんにぜひ知っておいてほしいと思ったからです。少しでもいいので、覚えておいてほしいと思います。

ちなみに、「震災復興支援室」は2016年度から「那須農場復興支援室」に名前を変えて、2021年度に同学会から南沢会に組織変更するまで活動を続けていました。

放射能標識が記された、震災後の牧草ロール（2011年5月）



第3章

那須農場支援活動の始まり

勇気米を引き継ぐ

当時学部生は、農薬などを使わない「勇気米（有機米）」をこのすぐ近くの田んぼで毎年作っていました。しかし、当然学部生も来られなくなってしまったので、この勇気米を私たちが引き継ぐことにしました。

2012年5月26日、最初の田植えをしました。みんなで一列に並んで裸足で田んぼに入り、大量の苗を機械ではなく手で植えていきます。通りがかった近所の農家のおばちゃんたちが「あらあ、手植えしてんの。いまだき珍しいねー」と言っていました。

農薬を使わないので、稲の天敵であるヒエが生えてきます。これが稲と姿かたちがそっくり。ヒエを放置していると、稲がやられてしまいます。ヒエ抜きだけのために、真夏に田んぼに来たこともありました。

田植えして、憎きヒエと戦って、稲刈りをする。貴重な経験でした。





毎月の支援労働が始まった

目に見えない敵である放射性物質をやっつける除染活動と農場の仕事の支援などは震災後からそれぞれ活動をしていましたが、同学会として毎月定期的に行う支援労働が始まったのは、この2012年の5月26日からと記憶しています。同学会が中心となって始めましたが、女子部の卒業生の方、保護者の方、そしてそれぞれの子供たちが毎月集まりました。最初の頃はゆっくり食事を楽しむ余裕もなく、スーパーの298円の弁当などを冷たいまま食べていました。



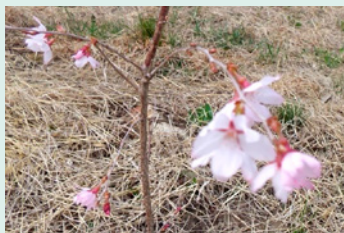
復興のシンボル、100本の桜

2012年11月24日。松原君のアイデアで、農場に100本の桜を植えました。苗木は、園芸関係の会社を経営されている2年上の先輩がご用意くださいました。

100本のうちの60本は、桜並木にしました。約8m間隔で60本。約480mの桜並木にする計画です。桜の苗木は、ごぼうくらいの細さで高さは約1メートルのものです。こんな細くて頼りない苗木が、何年何十年すれば大きくなるのかなんて想像もつきませんでした。

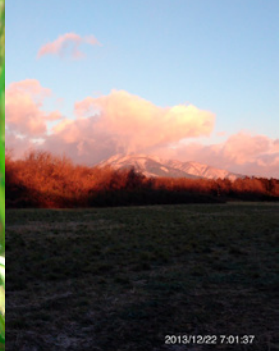
しかし、いつか大きな立派な桜の木になって、近所で有名な「自由学園那須農場の桜並木」になってほしい。復興のシンボルの桜になってほしい。たくさんの方々のそんな願いを込めて、皆で夢中で植えました。翌年には、その細い小さな木からほんの小さなピンク色の花が咲きました。それが今では3m以上の大きな桜の木に成長し、1年ほど前の調査では53本が元気に育っています。

Google Earthで「自由学園那須農場」を検索すると、農場の一角に茶色の小さな物体がほぼ直線に点々と並んでいるのが確認できます。空からの写真なのでそれが桜だとはもちろん判別はできませんが、みんなの桜並木をぜひご覧ください。



細い一本の桜の苗木から、
2013年に花開く。
下の写真は2026年の春の桜並木。





2013/12/22 7:01:37

第4章

いつか、子供たちが戻ってくる日のために

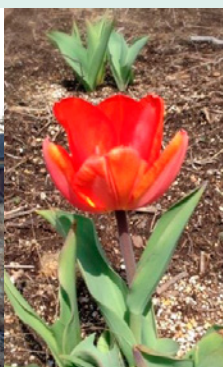
農場を元気なまま守る

除染活動をはじめ、農場の仕事、牛舎、施設の修繕、草や石との戦い、梅やブルーベリーの収穫など、やることはたくさんありました。

学園の大芝生が大雨で冠水してしまった時に、その芝を農場に移植したこともあり、紫色の芝桜を植えたこともあり、小洒落たチューリップの小径を作ったこともあり、自分の好きなように思いのままに綺麗な花壇を作った人たちもいました。

地元の農家さんたちとの交流もあり、こてこての栃木弁に囲まれたこともあり、牛の飼料にするトウモロコシ(デントコーン)の大規模な収穫。牛舎にいる牛を放牧地に移動させる牛追い、などなど。

いつか、学園の子供たちがここに戻ってくるその日のために、農場が元気でいるために、多くの人がここで活動してきました。



第5章

農場には子供たちがよく似合う

2023 年、教育農場として復活

そして、2023 年の春。

那須農場の放射線量の値が、国の水準と学園が定めた南沢の水準を下回ったことが確認されて、学園の子供たちが以前同様に農場を利用することができるようになりました。教育農場として復活することが、決まったのです。

あの震災から丸 12 年。長かった。

学園と思いがつながらず、一時は「学園は農場を手放してしまうのかもしれない。那須農場はもうなくなってしまうのかもしれない」とさえ思った時もありました。

私は、ある会議でその決定を正式に聞いたのですが、農場職員とそのご家族たち、当時の仲間たちの顔が浮かんできて、涙が溢れました。

子供たちの声が戻った

幼方さんはよく、農場には子供たちがよく似合うとおっしゃいます。子供たちの声がするのがうれしいと。

今日もここに、学園の生徒を含む小中学生が何人も参加していますが、彼ら彼女たちがここにいるということはいずれの限りであります。那須農場が戻ってきたという証であります。

第6章

那須農場だからこその出会い

無心になって労働する

那須農場の魅力は人それぞれですが、私はその一つは、無心になって労働することだと思います。

この大自然の中で、思い切り労働をして、みんなで食事をして、食器を洗って、いろんな話をして、翌日もまた労働する。くたくたになるまで労働する。学園の生徒って、なんかそれがあるんです。染みついている。男子部の高等科の時にはサボってばかりいて生意気だった私でさえ、それがなんだか今でも身体に染みついているんです。

那須農場だからこその、幸せな出会い

そして、もうひとつ。ここで、多くの方との出会いがありました。男子部・女子部の卒業生はもちろん、保護者の方にも出会うことができました。子供たちとも出会えました。小学生の時に農場に来て、女子部男子部に入学した子たちもいます。もう社会人になっている子もいます。農場の職員になっちゃった子もいます。那須農場だからこその、幸せな出会いだと思います。

できることを、できる人が、できる時にする

この支援活動を長く続けていきたいと思っています。子供たちが農場に戻ってくるといふ一番大きな目標は達成しましたが、それだけではない。これからも、農場をみんなで守っていきたい。それには、「できることを、できる人が、できる時にする」という思いが、大事なことのひとつだと思います。

無理はせず、やれることをやろう。

もちろん、忙しい時には無理してやることもあります。やれることを長く続けていきたいです。たとえ農場に実際に来られなくても、たとえ遠く離れたところにいたとしても、それぞれの場所から農場に思いを馳せる、それこそが農場を支える大きな力になると思います。同じ空の下、事故がないことも祈る多くの人のその思いが、農場職員やご家族、働いている人たちの支えにきつとなると思います。

たくさんの方に、感謝しています

たくさんの方に、感謝しています。

震災後の計り知れないほどの混乱の中でも、私たちの活動を受け入れてくれた農場職員とご家族の皆さんに、心から感謝します。

毎年毎年この活動を引き継いで脈々とそして確実に続けてリードしてくれた同学会・南沢会の本部委員の方たちに、感謝します。

いつも見守っていてくださる那須友の会の方たち・地域の方たちに、感謝します。

そして、出会えたすべての大切な農場仲間に、感謝します。

子供たちが、農場のこの高くて広い空の下で、豊かな気持ちで大切な時間を思いっきり過ごすことができるように、願っています。それを、これからもみんなで守っていきたいです。

那須農場は、今日も元気です。



2026年7月の那須農場支援活動より

A photograph of a rural landscape at sunset. The sun is low on the horizon, casting a warm orange glow across the sky and the ground. A dirt road leads from the foreground into the distance, where a tractor is visible. To the right of the road, there is a wooden fence and a field. The sky is filled with soft, orange-tinted clouds.

おわりに

阿部さんのお話は、東日本大震災をきっかけに始まった支援活動が、やがて那須農場を支える活動へとつながり、学生たちが再び農場へ戻ってくるまでの12年間を振り返るものでした。

仙台で被災した同級生・松原さんの姿を知り、「同学会として、何かできることはないか」と考えたことから始まった震災復興支援。その後、原発事故の影響によって学生たちが来られなくなった那須農場では、勇気米の田植えや除染、農作業、施設の修繕、そして復興のシンボルとして植えた100本の桜など、多くの人々たちによる活動が続けられてきました。

「いつか、学園の子供たちがここに戻ってくるその日のために」。そうして活動が続けた先に、2023年、学生たちは再び那須農場へ戻ってきました。しかし、阿部さんのお話はそこで終わりません。那須農場で無心になって働くこと。世代を越えた人たちと出会うこと。そして、「できることを、できる人が、できる時にする」という形で、これからも農場を支えていくこと。支援活動を通して阿部さんが感じてきた、那須農場だからこそ生まれる人とのつながりについても語られました。震災から始まった支援活動は、形を変えながら現在へと続いています。阿部さんが最後に語った、**「那須農場は、今日も元気です。」**という言葉は、その歩みを何よりよく表しているように思います。

「知ること。伝えること。」では、これからも那須農場に関わってきた方々のお話を紹介していきます。

次回は、男子部46回生の中村さんのお話をお届けします。